

## 石井式漢字教育で幼児が漢字をすらすら読む

なぜ、わざわざ冒頭でこうした言葉の重要性に触れたかと言いますと、実は私が 50 年来提唱してきた石井式漢字教育とは、幼児期から楽しく漢字を学ぶことを通して、まさにこの“言葉の豊かさ”を身につけ、それによって、子どもたちの自ら学び考える力を伸ばすことを目的としたものだからです。

「幼児期から漢字を」などと言いますと、それだけで「最近、ひらがなの読み書きだけでは他の子と差がつかないので、とうとう幼児に漢字まで教え込む時代になったのか」などと早合点する方がいますが、これはまったくの誤解です。

まず第一に、石井式では、ひらがなの読み書きの延長として漢字を教えるのではなく、幼児に最初から漢字で教えます。たとえば、目の前に鳩がいたら、はじめから「はと」ではなく「鳩」として教えてあげるわけです。

第二に、石井式では、幼児に漢字を書かせません。読めれば、それでよしとするのです（「読み先習」）。

すると、どんなことが起こると思われませんか？

ご存じのように、幼児というのは、われわれ大人をはるかに凌ぐ記憶の天才です。特に、漢字のような特徴のある形をそのままイメージとして記憶するのは、もっとも得意とするところですから、読みだけならいとも簡単に覚えてしまいます。

しかも、このとき、実際に鳩なら鳩) 蟻なら蟻の実物や写真や絵など

を示しながら漢字を教えるようにしますと、漢字の読みと一緒に指し示す内容(=意味)もしっかりと記憶に刻まれるため、次に漢字だけ目にしたときも、鳩や蟻の姿を生きいきと思い浮かべることができるのです。

ここまでの話で、察しのよい方なら、もうおわかりでしょう。そう、私のいう漢字教育とは、ただ“漢字を”教えることを目的とした詰め込み式の教育ではなく、漢字を一つの手段とした“漢字で”教える言葉の学習なのです。

おそらくお母さん方の多くは、漢字教育などという言葉を聞くと、学校時代の書き取りのドリルや小テストなどを連想し、あまりよいイメージは浮かばないのではないかと思います。

しかし、読み先習の学習法ならば、子どもたちは決して漢字を嫌がりません。それどころか、幼児期なら誰もがもっている素晴らしい記憶力を十分に発揮でき、また一度覚えた漢字に出会うと「あ、知ってる」「読める」という喜びがあるので、漢字への興味はどんどん深まり、語彙も自然と豊かになっていくのです。

現往、石井式漢字教育を実践する幼稚園や保育園は全国に約 700 園ほどありますが、その園児たちは、一年に 300~500 字の漢字をらくらくと覚えてしまいます。そうして、ゲームや遊びの中で繰り返し漢字に触れることによって、いつの間にか、漢字かな交じりの絵本もひとりで読めるほどに言葉の力が身についているのです。